

【実践報告】

電子辞書時代を見据えた英語辞書指導のあり方 —高等学校における英英辞典の活用を中心に—¹

関山 健治
中部大学

Key words: 高等学校、辞書指導、英英辞典、電子辞書

英語学習において、辞書が必需品であることは言うまでもない。辞書の使い方に習熟することで、学習者は授業外でも自律して英語を学び続けることが可能となる。

2009 年告示の高等学校学習指導要領では、生涯学習の観点から辞書指導について以下のように述べられている。

辞書の活用の指導などを通じ、生涯にわたって、自ら外国語を学び、使おうとする積極的な態度を育てるようにすること

(文部科学省, 2009)

また、2018 年告示の新学習指導要領では、小学校での英語の教科化に伴い、中学校における辞書指導との連携についても次のように言及されている。

中学校で身につけた使い方を基礎として、辞書を効果的に活用できるようにすること

(文部科学省, 2018)

新学習指導要領においては、中学校で辞書の基礎的な使い方を時間をかけて指導するようになるため、高校では今まで以上に辞書をより応用的、発展的に使えるようになることが求められている。

一方で、時間的な制約もあり、英語の授業での辞書指導は十分に行われているとは言えない。とくに、和英辞典や英英辞典など、英和辞典以外の辞書と連携した辞書指導や、近年主流となった電子辞書を使いこなすための辞書指導の具体的な方法論については、英語辞書の研究者や英語教員の間でも十分に議論されていない。

¹ 本論は、2018 年 10 月 27 日に行われた第 14 回中部大学英語教育研究会における発表をもとに加筆したものである。

本論では、普通科高校における英語辞書指導の一例として、学習英英辞典を活用させる指導について、英語辞書学の知見をふまえながら論じる。まず、本論の前提となる理論的背景を概観し、従来の辞書指導の問題点を明らかにする。次に、高校の英語の授業において英英辞典を活用する際の留意点について考察し、実際の指導例についてもとりあげる。

理論的背景と高校における英語辞書指導の現状

一カ国語辞典と二カ国語辞典

辞書は一カ国語辞典(monolingual dictionary)と二カ国語辞典(bilingual dictionary)に分類される。英英辞典、国語辞典は前者、英和辞典や和英辞典などは後者の例である。一カ国語辞典は、ある語句の意味(語義)を同一の言語で定義し、より分析的に説明したものである。一方、二カ国語辞典は、語義を別の言語の語句(訳語)で置き換えて示したものである。

初学者にとっては、目標言語の語彙力が限られているため、学習者の母語で訳語を与える二カ国語辞典(日本人英語学習者の場合は英和辞典)が用いられることが多い。日本では、欧米の二カ国語辞典とは異なり、訳語を羅列した対訳集的な辞書ではなく、用例を豊富に載せ、文法的な説明も多くした学習英和辞典が普及している。そのため、小学生をはじめとした入門者向けから高校生以上を対象とした上級レベルに至るまで、学習者の英語のレベルに応じた様々な学習英和辞典が刊行されている。

一方、英英辞典をはじめとした一カ国語辞典は、二カ国語辞典と異なり、母語を介することなく目標言語のみで定義を理解する必要がある。そのため、英英辞典は英和辞典の上級版であるという認識を持つ英語教員も多い。日本の高校における辞書指導においても、大学受験を目的として英語を学ぶ際には英英辞典は負担になるだけであると考える教員もいれば、逆に、英英辞典を生徒に勧めたものの、十分な辞書指導が行われないために宝の持ち腐れになってしまっているという場合もある(山岸, 1998)。

実際には、英英辞典と英和辞典は編纂方法も編集方針も全く異なった別々の種類の辞書である。そのため、学習者のレベルに関係なく、目的に応じて両者を使い分ける指導が必要となる。

英語母語話者向け英英辞典と英語学習者向け英英辞典

英英辞典は、英語母語話者向け辞典(Monolingual English Dictionary: MED)と英語学習者向け辞典(Monolingual English Learner's Dictionary: MLD)に分けられる(関山, 2017)。MED は、日本語母語話者にとっての国語辞典に相当するものであり、英語を母語とする成人が、主に難語の意味や綴り、発音などを確認するために使う辞書である。一方、MLD は成人の英語非母語話者を対象にし、定義で用いる語を基本的な 2000-3000 語に限定した制限定義語彙(controlled defining vocabulary)の採用や、語義の判別を容易にする小見出し(shortcut)、用例を多く載せるなど、英語学習者への配慮が随所に見られる。

英語学習者が初めて英英辞典を使う際には、MLD を選ぶべきであることは言うまでもないが、冊子版の MLD は英和辞典よりも高価であるため、以前はクラス全員に対して英英辞書指導を行うことは困難であった。近年では、高校生向けの電子辞書の多くに

*Oxford Advanced Learner's Dictionary (OALD)*や*Longman Dictionary of Contemporary English (LDOCE)*といった MLD が収録されている。そのため、電子辞書を使っている生徒が多い高校では、生徒に金銭的な負担を強いることなく、すぐに英英辞典を使った辞書指導が行える環境にあるが、実際には英英辞典の指導はほとんど行われておらず、難関大学に所属する大学生でも、英英辞典を全く使ったことがないという者がほとんどである(山岸, 1998)。

電子辞書と冊子辞書

1970 年代後半以降、液晶や半導体技術の進展とともに電子辞書²が普及した。冊子辞書とほぼ同等の辞書データを内蔵したフルコンテンツタイプの電子辞書は、発売当初は専門家向けの製品が多く、高価格であったが、2000 年代に入り、英語以外の教科で用いられる辞書や問題集などを収録した高校生向け機種が登場により、学校現場に急速に普及した。とくに、冊子版では 4000 円以上する学習英英辞典が高校生向け電子辞書に搭載され、英和辞典と連携して検索できるようになったことは、辞書指導に一大変革をもたらしたと言っても過言ではない。

一方で、電子辞書を単に「複数の冊子辞書をコンパクトにまとめ、場所を選ばず迅速に辞書が引ける道具」ととらえている教員も多い。そのためか、電子辞書独自の機能を活用したり、英英辞典の記述に出てくる未知語を英和辞典にジャンプして日本語で意味を確認するといった、いわゆる電子辞書指導はほとんどなされていない(関山, 2005)。そのため、英英辞典を搭載した電子辞書を持ってもどのように引けばいいかわからず、宝の持ち腐れになってしまっているケースは多い。

2007 年に iPhone が発売されてからはスマートフォンが高校生にも普及し、高価な電子辞書を購入するかわりに、スマートフォン上で使える独自編集の無料辞書アプリや翻訳サイトを辞書代わりにする生徒が増えている。搭載辞書が必要以上に増え、高機能化と合わせて必要な情報が手早く得られなくなった電子辞書専用機を敬遠し、訳のみが手早く検索できる辞書アプリや翻訳サイトに頼ってしまう生徒が多い近年では、情報を厳選した受験用単語集を辞書代わりにしていた数十年前に辞書検索環境が逆戻りしているとも言える。電子辞書を単に「小さくて速く引ける冊子辞書」ととらえるのではなく、電子辞書独自の使用方法に習熟させる「電子辞書指導」がとくに英語教育現場では求められているのである。

英英辞典を用いた辞書指導の方法と留意点

前節で、理論的側面をふまえながら高校における英語辞書指導の現状を概観した。電子辞書の普及により、英和辞典にとどまらず、英英辞典や和英辞典などと連携した辞書指導を行う環境が整った一方で、学校現場では複数種の辞書を使い分ける指導や、電子辞書をはじめとした多様な辞書メディアに対応した辞書指導がほとんど行われてい

² 電子辞書の歴史、種類についての詳細は Sekiyama (2016)、関山(2017)を参照。本論では、特に断らない限り携帯型で辞書データを本体に内蔵した電子辞書専用機を「電子辞書」と称する。

いことを指摘した。本節では、英語に興味を持つ生徒が多い高校の英語教育現場を主な対象として、電子辞書に搭載されている英英辞典を活用することを目的とした辞書指導の方法と留意点について考察する。

用例を活用させる指導：例文検索機能との連携

英英辞典の使い方を指導する場合、定義の読み方から導入することが多いが、英英辞典を全く使ったことがない生徒にとっては敷居が高いのではないだろうか。筆者としては、英英辞典の導入として用例を読ませる指導から入ることを提案したい。辞書の用例を読むことは英和辞典を使う際にも指導する技能であるため、高校生の学習者にとってなじみがあるからである。

英和辞典と異なり、英英辞典の用例には訳がないため、用例を吟味すること自体が文の意味をとらえる練習になる。たとえば、名詞の **deposit** を英和辞典と英英辞典で引いてみると、次のような用例が見つかる。

páy [máke, léave, pùt (dówn)] a depósit of \$500 on a new car

新車に 500 ドルの頭金を払う. (G5 s.v. deposit)

A £ 50 deposit is required when ordering, and the balance is due upon delivery. (*COBUILD* s.v. deposit)

英英辞典の用例は、コーパスでの出現例をそのまま用いたフルセンテンスのものが多。実際の英語で用いられた例を切り取った用例は、高校生にとっては難解に感じることも多いが、電子辞書に搭載のジャンプ機能を使えば英和辞典での再検索が容易になる。

用例の総数が多い学習英和辞典よりも、学習英英辞典の大きな特徴である。教員にとっては、電子辞書の用例検索機能を使用すれば、辞書全体から特定の語が用いられている用例を抽出することができるので、授業で新出単語を導入する際や試験問題で用例を提示する際に大きな助けとなる³。

英和辞典と英英辞典を使い分ける指導：既習語を英英辞典で引かせる

英英辞典を使わせる際に最も重要なことは、すべてが英語で書かれているという英英辞典特有の威圧感を取り払うことである。英語を学んでいて未知語に遭遇した際に心細い気持ちになり、辞書に助けを求めることは誰もが経験するであろうが、その際に英英辞典を引けば突き放された気持ちになるだけであろう。英英辞典を使うことで挫折感を味わうことがないようにするためには、未知語は英和辞典で調べ、英英辞典はすでに知っている語を引くために使うようにするとよい。

たとえば、**polemic** という語の意味を知ろうと思い、英英辞典で調べると、以下のよう記述されている。

³ 先述の **deposit** の場合、名詞以外の用例も含めると、*OALD* では 28 例検索される。

a written or spoken statement that strongly criticizes or defends a particular idea, opinion, or person (*LDOCE* s.v. polemic)

2000 語の制限定義語彙で平易に定義している *LDOCE* でも、通常の高校生がこの定義を読んで即座に意味を理解することは困難である。一方、英和辞典では以下のように訳語で示されているので、容易に意味を知ることができる。

論争、論戦 (*W4* s.v. polemic)

このように、高校生が大学入試問題で出会うことの多い抽象語の多くは、英英辞典で得られる漠然とした語義よりも、英和辞典で訳語を与えられたほうが理解しやすいため、無理に英英辞典を引く必要はないであろう。

逆に、中学校で学習した具体名詞のように、高校生なら誰もが意味を知っている単語は、英英辞典の「語義」を読むことで、英和辞典の「訳語」にはない情報が得られる。たとえば、elephant (ゾウ) は、*OALD* では以下のように定義されている。

a very large animal with thick grey skin, large ears, two curved outer teeth called TUSKS and a long nose called a TRUNK. (*OALD* s.v. elephant)

「牙」は tusk が一般に用いられるが、より平易に outer teeth と言うこともできることや、ゾウの鼻は trunk を用いるなど、小中学校で習った基本的な単語でも英英辞典を使えば新しい知識を得ることができる。

とくに英語に強い興味を持つ高校生には、単語小テストの勉強などで英単語の日本語訳を覚えることに満足しないで、英和辞典を引いて意味を知った単語を、電子辞書のジャンプ機能を使って英英辞典で引き直し、その単語の語義を理解させるようにしたい。

英和辞典でしっくりこないときに英英辞典を引かせる指導

英和辞典と英英辞典を連携させる指導の一つとして、英和辞典の訳語では文意をうまく理解できないときに英英辞典の助けを借りる方法に習熟させたい。たとえば、多くの英語学習者は interesting を「おもしろい、興味がある」というような日本語訳で覚えている。しかし、次の英文のような interesting を「面白い [興味深い] におい」と日本語に直しても、どのような匂いなのかははっきりしない。

Ferrets have oil glands that give off an *interesting* smell.

英和辞典の訳語は限られているため、あらゆる文脈で使えるとは限らないが、学習英英辞典で interesting を引くと、次のように定義されている。

attracting your attention because it is special, exciting or unusual
(*OALD* s.v. interesting)

このように、英英辞典では、単語が持つ語義を説明的に定義しているので、「(ふだん経験しないような特別なことであるので) 注意を引く」という語義が得られる。そのため、学習者がすでに備えている母語の知識と連動して「奇妙なにおい、変なにおい」といった適切な意味をとらえることができる。

英語で発信する際に英英辞典を使わせる指導

従来の辞書指導では、和英辞典に頼りすぎると自然な英文が書けないので、英語を書くときは和英辞典を使わずに自分で表現を考えるようにといった指導をすることも多く、和英辞典に対して否定的にとらえていた学習者や教員も多い(山岸 1998)。

今では、教員が和英辞典の使用を制限すると、学習者は翻訳サイトなどを利用してより不自然な英語を書いてくことも多い。そこで、和英辞典と英英辞典を連携させることで、多少手間はかかるがより自然な英語を発信できる指導が求められている。

たとえば、「ぶちの犬」を英語で表現する際、(インターネットにアクセスできない環境の場合)多くの学習者は「ぶち」を和英辞典で引こうとする。最近の和英辞典は、そのまま使える自然な用例を豊富に収録しているので、このような簡単な英作文では和英辞典を使っても何ら問題はない。多くの学習和英辞典で「ぶち」を引くと、*a dog with brown spots / a spotted dog* といった英訳が得られるが、英英辞典と連携することで、和英辞典の英訳の適格性を判断することができる。

英英辞典で引き直す際は、犬や猫ではなく、斑点を必ず備えている動物を考え、その語を調べてみるとよい。たとえば、ヒョウ(leopard)やキリン(giraffe)などである⁴。

a large animal of the cat family, that has yellowish—brown fur with *black spots*. (OALD s.v. leopard)

a tall African animal with a very long neck and legs and *dark spots* on its yellow—brown fur (LDOCE s.v. giraffe)

英英辞典の語義の中にも *black spots*、*dark spots* といった表現が見られるため、和英辞典に収録されている英訳が補強され、学習者は安心して和英辞典を使うことができるようになる。電子辞書の中には、和英辞典と英英辞典の語義を並列表示させることができる機種⁵も多いので、両者を容易に見比べることができる。

従来の辞書指導では、英和辞典や英英辞典は、英語を読むための受信用途で使い、和英辞典は英語を書く際に発信用として引く辞書であると考えられてきた。しかし、英英辞典を英語で発信する際に和英辞典と併用することで、英語母語話者が身近にいない環境で英語を学ぶ学習者も自信をもって英語で表現することができるようになる。

英英辞典を用いた学習活動例

⁴ もちろん、*dalmatian* のように、斑点のある犬を引いてもよい。

⁵ メーカーにより「さらに検索」「2画面検索」等、名称は異なる。

本節では、前節で論じた学習英英辞典を用いた辞書指導の方法論をもとに、筆者が大学での英語の授業において行った具体的な学習活動例を取りあげる。

定義文を使った単語小テスト

英英辞典に興味を持たせ、継続的に英英辞典を使わせる簡便な方法としては、多くの高校で行われている授業開始時の単語テストで英英辞典の定義文を利用するとよい。筆者の資格英語（英検・TOEIC）の授業では、共通教材である単語集から範囲を区切って毎回小テストを行っているが、単に出題範囲の単語の対訳を選ばせたり書かせたりするのではなく、文定義を採用した学習英英辞典を使い、次のように出題範囲の単語を空欄に入れさせる（あるいは選択肢の中から選ばせる）形式をとっている。

If someone is _____, they are given a more important job or rank in the organization that they work for. (COBUILD s.v. promote)

ここでは、**promote** の学習英英辞典での定義を利用し、見出し語部分を空欄にして穴埋めさせるものである。最初のうちは、英検 2 級や TOEIC で 600 点以上のスコアを持ち、機械的な単語の暗記は得意だったという者も、このタイプの小テストでは選択肢を用意してもほとんど点数がとれず、日本語を介さずに単語量を増やすという初めての経験に苦しむことになる。学習英英辞典の説明をすることで、学生は訳を丸暗記するのではなく、英英辞典を引きながら単語学習をするようになり、半期の授業が終わる頃には選択肢をなくしても多くの学生が満点近くをとるようになる。

定義しりとり

英英辞典の定義を用いた受動的な活動の例として、ペアワークやグループワークとして短時間で実施できる定義しりとりを紹介する。「親」を一人決め、親が考えた単語を英英辞典で引き、その定義文を読み、他の学習者がその定義文にあたる単語を推測して答えるというものである。次回は正解だった者が「親」となり、正解した単語の末尾の文字で始まる単語を英英辞典から選び、定義文を読み、同様に他の学習者が単語を推測して答えるということを繰り返す。

「しりとり」形式にすることで、「親」が考える単語の範囲が狭まるため、推測しやすくなる。学習者のレベルに応じて、出題語の品詞を限定したり、平易な単語に限定する⁶といった工夫も必要となる。

スリーヒント単語当てゲーム

「定義しりとり」は英英辞典の定義をそのまま読み上げる活動であったが、ここではより上級レベルの学習者を対象に、自力で定義文を作り、発話する活動を取りあげる。もっとも、英英辞典の定義文を自力でこしらえるのは困難であり、その必要もない。こ

⁶ 学習英英辞典に記載されている頻度ランクを用いるとよい。

ここでは、発話する文型を SVC / SVO の 2 種類に固定し、ある語の定義を単文で 3 つ述べるようにするとよい。

方法としては、「親」を決め、この 3 つの文を「スリーヒント」として述べ、他の学習者が定義文にあたる語を推測して答えるというものである⁷。たとえば、apple を定義する場合、次のような例が考えられる。

Nani-nani is fruit.

Nani-nani is red and round.

In Japan, Nagano and Aomori produce Nani-nani a lot.

発話する文型を固定しているので、形式よりも内容に専念することができる。また、定義文を 3 文に限定することで、英語運用能力による差が少なくなり、英語を話すことが得意な学習者でも、限られた数の文で出題語を的確に定義する必要がある。上級レベルの学習者にありがちな、発話量が多いが、要を得ないため内容が理解されにくいということを避けるための練習にも最適である。

結論と今後の課題

本論は、高等学校における英語辞書指導の現状を、英語辞書学の知見も援用しながら概観し、電子辞書に搭載されている学習英英辞典を使ってどのような辞書指導が行えるかを具体例も交えながら考察した。

冊子辞書、電子辞書（専用機）、オンライン辞書、スマートデバイスの辞書アプリなど、様々な辞書メディアが混在、拮抗する中で、日本人英語学習者にとって望ましい英語辞書指導はどうあるべきか、単純な結論を出すことはできない。学習英和辞典の編纂に携わる筆者としては、今後は、学校教育現場で辞書指導の実践をされている教員の皆を対象とした辞書指導に関する調査を行うとともに、様々な実践例からも学びながら、自ら編纂に携わる辞書の内容に還元していくことを予定している。

引用辞書一覧

G5: 『ジーニアス英和辞典（第 5 版）』 大修館書店(2014)

W4: 『ウィズダム英和辞典（第 4 版）』 三省堂(2018)

COBUILD: *Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary 9th Edition*. Harper Collins (2018).

LDOCE: *Longman Dictionary of Contemporary English 6th Edition*. Pearson Education (2014).

OALD: *Oxford Advanced Learner's Dictionary 9th Edition*. Oxford University Press (2015).

引用文献

文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領 外国語編』.

文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領 外国語編』.

⁷ 解答となる語が入る部分は"Nani-nani"のような語で置き換える。

- 関山健治 (2005) 「辞書をどう教えるかー電子辞書を視野に入れた辞書指導の可能性ー」
『ことばと人間』 第5号, 21-31.
- 関山健治 (2007) 『辞書からはじめる英語学習』 東京：小学館.
- 関山健治 (2017) 『英語辞書マイスターへの道』 東京：ひつじ書房.
- Sekiyama, K. (2016). Twenty-Five Years of History and Prospects of Handheld Unabridged
Electronic Dictionaries in Japan: Galapagosization's Gains and Losses. *Lexicon*, 46, 15–26.
- 山岸勝榮 (1998) 『英語教育と辞書の思想と実践』 東京：こびあん書房.

著者情報

関山健治は、中部大学の教員である。1996年に南山大学大学院（外国語学研究科英語教育専攻）で修士（英語教育）、1999年に愛知淑徳大学大学院（文学研究科英文学専攻）を単位取得退学。2000年4月から沖縄大学専任講師、2006年4月から同准教授、2014年9月から中部大学准教授。専門は英語辞書学、応用言語学。『ウィズダム英和辞典（第2版(2006)・第3版(2012)）』、『プログレッシブ英和中辞典（第5版(2012)）』の執筆、校閲に携わる。『ベーシックジーニアス英和辞典（第2版(2018)）』では編集委員としてコラム執筆、見出し語選定、ランク設定などを担当した。辞書のユーザーインターフェイスの研究に携わるとともに、辞書の執筆、校閲を通して英語教育現場における辞書指導にも関心を寄せる。『辞書からはじめる英語学習』（小学館・2007）、『英語のしくみ』（白水社・2009）、『英語辞書マイスターへの道』（ひつじ書房・2017）をはじめとした著書、翻訳書、論文などがある。

E-mail: sekiyama.kenji@nifty.ne.jp